或問　WAKUMON　97
No.32,（2017）pp.97-108

三島由紀夫『午後の曳航』論
――少年による猫殺しをめぐって

朱　田云

はじめに

『午後の曳航』は三島由紀夫が昭和 38 年 9 月に書下ろした長編小説として講談社より刊行されたものであり、戦後間もない横浜の港町を舞台にして、「第一部 夏」と「第二部 冬」に分かれている。「夏」では舶来洋品店を営む未亡人の母、房子と二等航海士の塚崎竜二と恋に落ち、その二人のセックスを壁の穴から覗き見する登という十三歳の息子が描かれ、「冬」では房子と竜二の再婚に反発した登による敵対と復讐が語られている。この小説は林房雄に「‘63 ベスト 5 小説」の 4 番目に選ばれ、「氏の理想主義の再々度の勝利」[1]と賞賛された。森川達也は「三島の『午後の曳航』などの場合がそうであるように、少年の持つ無心な残酷さを通して大人―人間の醜悪さを剔抉する作品（後略）」[2]と、佐伯彰一は「三島文学を思い返してみれば、ほとんど一切の針が、死という極北を目指している。（中略）『午後の曳航』までが、少年の偶像たる雄々しい海員の毒殺によって、円環が閉じられていた。」[3]と評した。この作品について、村松剛は「三島氏にとってたいへん意欲的な作品であると同時に、今思い返せば三十七年五月『豊饒の海』の構想なるとあるように着々と準備された作品の一つかもしれない」[4]と解説している。野口武彦は、「『午後の曳航』は、ロマン主義的人間を廃業した人物がそのロマン主義に報復されて死ぬ物語である。」[5]と定義づけた。「三島氏の書下ろし長篇であるこの小説においても、ロマン主義の「海」のイメージが作品の基本的色調をなしているように思われる」[6]と論じた磯田光一をはじめ、田坂昴[7]、菅原洋一[8]、越次倶子[9]や梶谷哲夫[10] などの論説も、「海の男が喪失した

---

[1] 林房雄「文芸時評」、『朝日新聞』、昭和 38 年 11 月 29 日。

[2] 森川達也「少年もの 『朝の村』の新しさ 現実の全体を鋭く撃つ方法」、『図書新聞』、昭和 41 年 2 月 5 日。

[3] 佐伯彰一「捨て身のエゴ」、『新潮 臨時増刊 全巻 三島由紀夫大鑑』、昭和 46 年 1 月、224 頁。

[4] 三島由紀夫『三島由紀夫集 新潮日本文学 45』新潮社、昭和 43 年 9 月、692 頁。

[5] 野口武彦『三島由紀夫の世界』講談社、昭和 43 年、211 頁。

[6] 磯田光一「仮構のロマン主義――『午後の曳航』について」『磯田光一著作集 1 』小沢書店、平成 2 年 6 月、71-72 頁。

[7] 田坂昴『増補三島由紀夫論』風濤社、昭和 52 年 9 月、298-310 頁。

[8] 菅原洋一『三島由紀夫とその海』近代文芸社、昭和 57 年 12 月、51 頁。

[9] 越次倶子は「『午後の曳航』私論」（『国文学解釈と鑑賞 57(9)』平成 4 年、34-38 頁）では、「登は、『首領』と呼ばれている少年を中心とした不良少年グループの一員でもあった」と位置づけている。

[10] 梶谷哲夫『パトグラフィ双書 7 三島由紀夫 芸術と病理』金剛出版、昭和 46 年 10 月、252 頁。

栄光」や「少年による父殺し」などのキーワードにハイライトを引いている。ようするに、『午後の曳航』における父親になる竜二の栄光を中心にして、陸の父になる竜二の死の物語であり、三島のロマン主義の表れであるという読み方が多くみられる。

本稿では、それらの論考を踏まえて、あまりにも残虐すぎたせいか、今までほとんど論じられていない猫殺しのプロットを中心に、猫という対象、殺しという行為、少年という主体の正体を明らかにすることによって、猫、少年、竜二と三島が皆一体であるという考えから、テクストに潜んでいるもうひとつの読み方を掘り出してみたい。

一、「猫」ではない

小説の上半部・第五章に出てきた、少年グループの首領による「感情のないこと」の訓練をするため、主人公の少年登は猫殺しを命じられた。

> 登は思い切り仔猫をふり上げ、材木の上へ叩きつけた。指の間にはさまっていた温かく柔らかなものが、空気を切って、飛び去るのはすばらしかった。しかし、ゆびにはまだ柔毛の触感がほのかに残っていた。
>
> (中略)
>
> 登がもう一度つかみあげたものは、それはもう猫ではなかった。輝かしい力が彼の指先にまで充ちていて、彼は今度は自分の力が描く明快な軌跡をつまみ上げ、それを材木に何度となく叩きつけるだけだった。自分が素晴らしい大男になったような気がした。二度目にたった一度、仔猫は短い濁った叫びをあげた。――それはすでに材木から跳ね返って、土間の上に、後肢でゆるく大きく輪を描いて静まった。材木の上に点々と滴った血が、少年たちを幸福にした。(第一部・第五章)

いうまでもないが、猫殺しについては、これまでも多くの作品に描かれていたし、猫殺しをやったのは少年登が第一人者でもない。たとえば中世紀のヨーロッパでは、「魔女の使い」や「悪魔の化身」とされた猫が大量に捕まえ、火あぶりなどの残酷な方法で処刑された記録は多く残っている[11]。日本では、藤原定家の『明月記』[12]、兼好法師の『徒然草』[13]、新井白石の『鬼神論』[14]、鍋島の猫騒動による『佐賀怪猫伝』[15]、それから『百猫伝手綱染分』[16]、『嵯峨奥妖猫奇談』[17]

---

[11] 平岩米吉『猫の歴史と奇話』精興社、昭和60年2月。

[12] 藤原定家『翻刻明月記 』冷泉家時雨亭文庫編、朝日新聞社、平成24年1月。

[13] 吉田兼好『徒然草』大妻女子大学国文学会編、新典社、平成23年4月。

[14] 新井白石(他)『新井白石』岩波書店、昭和50年7月。

[15] 『近世實録全書 第2巻』早稲田大学出版部編輯、大正6年7月。

[16] 片ばみ屋米次郎『百猫傳手綱染分』元治元年8月。

[17] 中村琥珀郎[写]『大坂芝居狂言俳優台詞帳』明治年間。

の怪猫劇など挙げられるが、みな魔物、縁起が悪い、化けるもの、陰獣だ[18]と思われた猫である。それらの作品では、猫に噛みつかれ、死んだ人の敵討ちとして人は猫を殺したのである。西洋にせよ、日本にせよ、それらの猫殺しは、命の脅かしによる後発的な殺しであり、ネコが人間に「害」をもたらす「敵」であるからという納得できる殺しの理由がついている。

しかし、登という少年の猫殺しはそうではない。少年が殺したのは声の弱弱しい小さな捨て猫だった。防衛や反撃でもなければ、道理も弁えない、いわゆる背徳的な猫殺しである。その場面はこう描かれている。

> 首領は片手で首をつかむと、鋏の刃先を胸に当てて、咽喉までやわらかに切り上げ、両手で皮を両側へ押しひらいた。皮を剥いた筍のような、つややかな白い部分があらわれた。それは肌脱ぎになった優雅な首が、猫の鎧をかぶって、横わたっているように見えた。
>
> （中略）
>
> 次第に露になってゆく猫の内皮の、半透明な真珠母の美しさには、いやらしさがみじんもなかった。肋骨が透いて見え、さらに大網膜の下に温かく家庭的に動いている腸が透いて見えた。（第一部・第五章）

そして、小説の最後で、少年たちは竜二を殺すと計画を立てたとき、少年団の首領はこう語った。

> 要領は、前にも猫で練習したから、同じことだよ。何も心配は要らない。猫よりも一寸大きいだけさ。それに猫よりも、ちょっとばかり臭いだろう。（第二部・第六章）

小説の最後で竜二が死んだがどうかははっきりしていないにもかかわらず、『午後の曳航』の「創作ノート」では、竜二殺しに関して、眠り薬を飲んでからの症状について、「けいれん、顔色、嘔気、ひび、寒さ、ふるへ、鳥肌、痛さ、汗、唾液、脈搏、発熱、失禁や渇き」などの項目に分けて、四ページも及んだほど細かく、詳しく記されている。

さらに、竜二の死と解剖について三島の友である戯作家、演出家の堂本正樹はこう証言した。「この後が七、八枚あったのである。猫の解剖に照応して、手術用のゴム手袋を嵌めた少年たちは、竜二の灰色の徳利のセーターを剥がし、英雄の全裸を解剖する。この部分を思い切って削除したため、作品は余韻を生み、構成はより引き締まった」[19]。

それから『午後の曳航』の英訳者であるネイスンもこう語った。「私がこの小説を翻訳していた昭和三十九年中の或るとき、三島は私にこの描写に取りかかる前に実際に猫を殺して解剖したと語ったことがある。以前、医学生だった或る作家といっしょにしたとのことである。三島は

---

[18] 藤沢衛彦『図説　日本民俗学全集 3』高橋書店、昭和 52 年 5 月、252-255 頁。

[19] 堂本正樹『回想　回転扉の三島由紀夫』文春新書、平成一七年、七〇頁

さらにこうもいった。『ぼくは自分の眼で見たものでないと書けないんだよ。だけどぼくがしたいのは人殺しだから、ちょっと問題だな』。そして三島は大声で笑ったが、私はそのとき三島がいっていることの半分はほんとうだろうと思ったことをはっきりと覚えている」[20]。

それらの証拠や証言からみれば、猫殺しは竜二殺しの伏線であると通説は容易にわかるが、はたして、猫殺しの理由はほんとうに竜二殺しの練習にすぎないだろうか。

『午後の曳航』の「創作ノート」にその答えが潜んでいる。ノートでは、小説に出てもない獅子殺しについて下記の数行が書かれている。

> 獅子殺し
> （世界残酷物語を避ける）
> 獅子を殺さねばならぬ。英雄を殺さねばならぬ。[21]

その記述からみれば、ほんとうは、猫殺しよりは獅子殺しなのではなかろうという推察ができる。獅子は猫と同じく猫科だが、猫よりはもちろん大型だし、猫科で唯一の性的二形なものである。雄の獅子には立派な鬣があり、強そうに見えるが、ほんとうは牝より全然弱いものである。それはまさに竜二のイメージにぴったりしている。最初のころ、竜二の体が覗き見をしている少年の目に映ったのは男の力そのものだった。

> 厚い胸板、繊細な影を散らかす胸毛の息づきをはっきりと見せ、危険な目のかがやきは、たえまなく母の脱衣へ向けられていた。背後の月の反映は、彼の怒った肩に、一筋の金色の稜線を与え、彼の太い頚筋の動脈は、金色にふくらんでいた。それは本当の肉の黄金、月の光りと汗の光りが作った黄金だ。（第一部・第一章）

しかし、海を捨てて、大陸の父親になることを選んだ竜二について、少年は「卑屈な迎合的な笑い方をしたこと」や「ルンペンのような言い訳をしたこと」などを「塚崎竜二の罪科」として記録した。さらに、覗き見が発覚された登に対して、「父親」の役割を果たそうとした竜二の話は、少年の耳では、「猫撫での声」のように聞こえた。竜二はそういうふうに、少年が憧れた力強いものからだんだん少年が拒んだ「弱もの」になってしまった。

「肉の黄金」のような体を持ち、登の憧れであった竜二は結局、他の大人と異なることなく、登に向かった時、「卑屈的、迎合的」であった。そんな強そうに見えるが実際弱いものの竜二は、まさに雄「獅子」のようであり、「殺さねばならない」ものになる。

かつてモンテーニュが語るように、「私が猫と戯れているとき、ひょっとすると猫のほうが、私を相手に遊んでいるのではないだろうか」というロジックで考えてみれば、猫殺しの逆説も

---

[20] ジョン・ネイスン／野口武彦訳『三島由紀夫―ある評伝―』新潮社、昭和五一年八月

[21] 三島由紀夫『決定版　三島由紀夫全集９』新潮社、平成一三年一月、六五二頁

考えられる。つまり、少年が猫を殺しているとき、猫のほうが、少年自身の一部を抹殺しているということである。もっと正確的に言えば、猫や竜二が表れた「弱いもの」とは、これから卑劣な大人になる少年の弱い一部でもあると考えられる。少年がほんとうに殺したのは捨て猫でもなければ、「陸にも海にも本質的に属さない」竜二でもなく、むしろ弱いものとしての自分の一部であるだろう。十三歳まで、至上権をもつ祖母の狂おしい溺愛の下で、祖母の願望を先取りし、「小さな女の子」として外界と隔絶した中で育てられた三島のことだから、その可能性は十分あると考えられる。殺された猫の性別について、小説の中では明示されていないが、民間信仰に出た猫はほとんど女に化けたものだし、小説の中で殺された「仔猫」について、「声もなく、だらりと彼の指から垂れていた」、「家庭的に動いている腸」というふうに描写されていて、どう読んでも、弱弱しさ、女々しさや柔弱さが感じられる。それを殺してしまうというのが少年の猫殺しである。陰性的不安に伴う生きることによる混乱を解消するために、「弱いもの」として現れた仔猫や竜二に対して、死刑を執行するしかないわけである。違いがあるといえば、仔猫は見た目も中身も弱いが、竜二は強そう見えるが、中身は他の大人と変わらないほど弱いと少年は思っている。そう考えてみれば、猫殺しは、通説のようなエンディングの伏線や竜二殺しを暗示するのだけではないことがわかるようになる。少年に殺された猫と殺そうとする竜二は、少年自身の一部でもあるから。

そういう「弱いもの」が少年に殺されてしまう理由を推察するには、構造主義の元祖とされたクロード・レヴィ＝ストロースのトーテム理論が必要とされるだろう。レヴィによると、母系トーテムの制度は生物上における関連性を実証している。肉体や血は女により代々継承されていく。一方、父系トーテムの制度は、地域上における団結を表している。後者は内在的ではなく、外部のつながりであり、地縁性を持っている。つまり、人類学における女性的なるものは、物質的世界である一方、父なるものは精神的世界である[22]。肉体や血の継ぐことにつながる生と精神的世界につながる死は、少年にとって「女性的なるもの」と「男性的なるもの」として読み取れるだろう。少年たちに「醜悪」という烙印が押されたのも、「父親」そのものというよりは、陸の「父親」に含まれている「女性的なるもの」であろう。とっくに死んでしまった登の実の父は、「不在」という性質を持つため、陸の父親だからこそ持った陰性的、女性なるものも、その「不在」により無くなったわけである。そのために、登は「選ばれた者」、「幸せ者」（第二部・第四章）だと少年たちに思われている。ようするに、少年が欠けているためこそ強烈に望んでいるのは、女性なるものが含まれた通俗的陸の父親ではなく、肉体より精神、穏やかな陸より未知の海のような「男性的なるもの」である。

夢想の中では、栄光と死と女は、常に三位一体だった。しかし、女が獲られると、あとの

---

[22] クロード・レヴィ＝ストロース『LE TOTEMISEME AUJOUD'HUI』（中国語版）（商務印書館、平成二七年）を参考しながら、筆者がまとめたものである。

二つは沖の彼方へ遠ざかり、あの鯨のような悲しげな咆哮で、彼の名を呼ぶことはなくなった。(第二部・第七章)

この竜二の話を言い換えれば、栄光のために、そういう「女性的なるもの」と決別しなければならないことになる。『訃音』(昭和24年)にある「世間というものは、女と似ていて、案外母性的なところを持っているのである。」という言葉からも「女性的なるもの」の、三島が削除したい物質的「世界」が見出される。そういう世界は滅びて終わってほしいと三島は願っていたと考えられるだろう。

彼は自分にとって永久に機会の失われた、荘厳な、万人の目の前の、壮烈無比な死を恍惚として夢みた。世界がそもそも、このような光輝にあふれた死のために準備されていたものならば、世界は同時に、そのために、滅んでもふしぎはない。(第二部・第七章)

小説ではペルシア湾の夕焼けを「世界終末的」と形容しているところや、『午後の曳航』とほぼ同時代の作品、『帽子の花』(昭和37年)でみられる「私の満ち足りた気持ちは、たしかに自分が世界の終りに立ち会ったと感じるところからきている」ところ、『美しい星』(昭和 37 年)に登場する「死は今や美しい雲の形で地球人を取り巻いていた」ところ、それから『葉隠』(昭和43年)に出てくる「世界は皆からくり人形なり。幻の字を用いるなり」のところなど、どちらも三島による偏執的、「滅んでもふしぎはない」陰性的、「女性的なるもの」の「世界」を削除しようとする決心が見られる。高山秀三が分析したように、「三島幼年期の生育環境で何より目につくのは、祖母による虜囚生活とも呼べる状況であり、また、女性ばかりに囲まれていたという状況である。(略)女性ばかりに囲まれた男の子は、女性的立居振り舞という心情を育まれる一方で生活をともにする一団のなかの唯一の男性であることによって過剰に男性であることを意識させられるが、ときにその意識は過剰な攻撃性と残虐性を見せることで自分の男らしさを顕示しようという衝動をうむことにもなる。」[23]そうすれば、残されるのは生物的「存在物」ではなく、「存在」としての、精神上の「男性的なるもの」、いわゆる栄光の勝利になるのである。

猫を殺してから、少年は、「自分が素晴らしい大男になったような気がした」り、「忘れろ、女なんかは」、「I'm a new man」と歌ったりするようになった。それは大義のために、「女性的なるもの」は忘れるべきものと三島が考えていたからだろう。

二、「殺し」ではない

『午後の曳航』で猫の虐殺や解剖を書いた三島がほんとうは猫派であるのは周知のとおりである。独身時代の三島の書斎において、愛猫を小脇に抱いて寝転び子供の様な笑顔で写ってい

[23] 高山秀三『少年期における三島由紀夫のニーチェ体験』京都産業大学論集 人文科学系列第48号、平成27年、294頁。

る写真がアルバム[24]に掲載されている。そして、彼の机の引き出しには常に猫の好物である煮干が入っていたし、書斎の出入り口の建具には愛猫の為の小さな出入り口が作られていたという[25]。さらに、『朝日新聞』に連載されていた『きのふけふ』（昭和 32 年）[26]というエッセイ、原水爆実験問題をめぐる「ネコの首に鈴」というタイトルの短文では「ネコの首に鈴をつけるには、まづ段階が要る。鈴にイワシのハラワタでも塗っておく。ネコがやってきて、なめて、ころがして鈴の音にもなれ、そのうちに鈴の音をきくと、イワシを思ひ出してゴロゴロ言ふやうになる。そのときワナの仕掛けで、鈴が首にはまるやうにすればいい」というふうに書かれている。それを読んでいるうちに、猫を愛し、猫とのかけひきを愉しんでいる三島の素顔が浮かんでくるだろう。それから、『猫、「テューレの王」、映画』[27]という評論にも猫に対する愛情が描かれた。そこには「あの憂鬱な獣が好きでしゃうがないのです。芸をおぼえないのだっておぼえられないのではなく、そんなことはばからしいと思っているので、あの小ざかしいすねた顔つき、きれいな歯並、冷たい媚び、なんともいへず私は好きです。」とある。

不可解なことに、そんなに猫を愛した三島と結婚した相手は大の猫嫌いである。それで、三島は猫を飼うことが出来なくなってしまった。大の猫好きと大の猫嫌いとの結婚自体に理解に苦しいだろうが、結果から言えば、三島が結婚のため、猫を裏切る一方、その結婚が猫好きな三島を消してしまった。すると、その五年後、三島は『午後の曳航』に、猫好きどころか、猫好きでなくても読むに耐えないほどの残忍な猫解剖を登場させた。そして猫と共にこの世から消える予定があるのは竜二である。結婚のため、竜二が少年を裏切る一方、その結婚が竜二をこの世から消すきっかけにもなる。『鍵のかかる部屋』（昭和 29 年）に書かれたとおり、「愛は必ず残虐に帰着する。愛することは殺すことだ」。愛だからこそ殺すというロジックには女性に囲まれた幼少期を送り、自分の弱さに苦しみながら、能動的理想の生を回復させる三島の決意が垣間見える。

「わたしの思想は作品の完成と同時に完成して、そうして死んでしまふ。」という『十八歳と三十四歳の画像』（昭和 22 年）の一文を借りていえば、少年の弱さは、猫殺しと竜二殺しの完成と同時に無くなっていく。または「死処をえらぶことが、同時に、生の最上のよろこびを選ぶことになる」という三島の「二・二六事件と私」（昭和 41 年）の中の言葉に即すれば、三島の猫殺しは一つの世界創造の意志に貫かれた死による一種強烈な生の完成ともいえる。そういう少年の殺す行為の醍醐味について、早くも三島十八歳のころすでに書いた『中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃』（昭和 18 年）にいる殺人者が予告している。「殺人といふことが私の成長なのである。殺すことが私の発見なのである。忘れられていた生に近づく手だて。私

---

[24] 三島由紀夫『新潮日本文学アルバム 20』新潮社、昭和 58 年 12 月。

[25] 夏目房之助ほか『作家の猫』平凡社、平成 18 年 11 月。

[26] 三島由紀夫『決定版 三島由紀夫全集 29 評論 4』新潮社、平成 13 年 1 月。

[27] 三島由紀夫『決定版 三島由紀夫全集 27 評論 2』新潮社、平成 13 年 1 月。

は夢みる、大きな混沌のなかで殺人はどんなに美しいか。殺人者は造物主の裏、その偉大は共通、その歓喜と憂鬱は共通である」[28]。『午後の曳航』における「殺し」もその延長線にあると言えるだろう。

武田信明は、「登るは壁に穿たれた〈この世のものならぬ光輝への小さな一点の通路〉から母と二等航海士塚崎竜二の逢瀬を垣間見ることで、「海―男―女―少年」によって形作られる〈世界の内的関連〉に立ち会うという至福の瞬間を経験する」[29]と分析した。しかし、ほんとうにそのような図式の世界なのだろうか。

『午後の曳航』では「大義とは？それはただ、熱帯の太陽の別名だったかもしれないのだ」(第一部・第七章)と定義づけられている。つまり、大義というものは、空にあるものである。そういう大義は「海」の男だった竜二や「陸」の人間の代表としての少年の母から遥かに離れていると存在である。しかし、少年たちは違う。少年たちによる殺しは、恐怖を喚起した公開処刑のように、残虐性、展示性、暴力性や儀式性が含まれている。かつて公開処刑が見世物だった中世のヨーロッパでは、死刑の執行者はよく自分のことを神様の代理人と思い込んで、誇りと思い、一方、死刑を受ける人間は神様への感謝の意を込めていた[30]。つまり、死刑を執行する側と死刑を受ける側には、目に見えない媒介としての「神」が存在している。それと同じように、『午後の曳航』でも、自分が天才だと確信している少年たちはつねに自己神化の内部を持っている。すると少年の「殺し」も一種のベンヤミンの言う「神的暴力」[31]に近い法律の権威に勝てる暴力である。そういう暴力の残酷さは、世間がいわく「人殺しの罪」そのものよりずいぶん上回っているようであり、「超道徳」の創出なのである。少年の「殺し」に、「世間のいやらしい禁止の無限につづく鎖を絶ち切」る大義が潜んでいる。大人の世界で、目的はともかく、適法の限りでは、暴力は許されている。一方、少年たちの世界では、適法を問わず、彼らが正しい目的だと思う目的を実現する手段として用いられる暴力は正当化されている。そういう殺しの執行者である少年たちは、目に見えない「空」にある「大義」を握っている「神」の代理人ともいえる。少年たち

---

[28] 三島由紀夫『決定版 三島由紀夫全集16』新潮社、平成13年3月。

[29] 武田信明「三島由紀夫『午後の曳航』」『国文学 解釈と教材の研究』第30巻12号、121頁。

[30] 寺山修司『幻想図書館』(中国語版)民主建設出版社、平成27年2月を参考。

[31] ベンヤミンは、何らかの目的のために行使される暴力を神話的暴力(die mythologische Rechtsgewalt)と呼び、純粋にそれ自体のために行使される、何ものをも目的としない暴力を神的暴力(die gottliche Gewalt)と呼ぶ。しかも、「神的暴力」と「神話的暴力」とを、全面的に対立関係にあるものとして叙述しつつ、後者を否定的に、前者を肯定的に説明している。「神話的な暴力には神的な暴力が対立する。しかもあらゆる点で対立する。親和的暴力が法を措定すれば、神的暴力は法を破壊する。前者が境界を設定すれば、後者は境界を認めない。前者が罪を作り、あがなわせるなら、後者は罪を取り去る。前者が脅迫的なら、後者は衝撃的で、前者が血の匂いがすれば、後者は血の匂いがなく、しかも致命的である」(ベンヤミン著・野村修訳『暴力批判論 他十篇』平成6年3月、岩波書店を参考)。

の「殺し」は大義への唯一の道になる。仔猫のような生物的に弱いもの、竜二のような見かけ倒しの弱いものを殺した後は、栄光なる強者として生きていくという願望こそ、少年たちの肯定論に立派な動機を与えている。そういう殺しは善悪の前に立っている、または善悪を超越しているものとして、この世にあるほとんどの道徳基準を破る力そのものである。その破壊力による死は、その死に触れたものである猫、竜二、そして少年の弱い一部を無くした同時に、新たな存在も創出してきた。猫を解剖しないと、その内部が見られないと同じように、三島は、少年の猫殺しという可視的行為をもって、不可視な存在方式を探求する思想実験を行った。その殺しは生かしのためであるともいえるだろう。

三、「少年」ではなくなる

猫を殺し解剖した、そして竜二を毒殺する計画をした少年たちのことについて、野口武彦は、「こうした少年たちの残酷なアンファンティリズムは、こどもであることの特権に保護され、純粋培養されたロマンティシズムである。」[32]と論じた。それから、林房雄は、「十三歳の登と六人の非行少年グループは哲学的小悪魔群として描き出されている。現代の『虚無主義者』どもであり、天才を自称する最も卑小な精神を代表する」[33]と論じた。今までの研究は例外なくその少年たちに「悪」のラベルを貼っている。はたして、少年たちはそのとおりの「悪少年」なのだろうか。

それを解明するには、猫の解剖後、「みんなで猫を埋め」（第一部・第五章）たというところを見逃してはいけない。ほんとうの悪少年は、猫を埋めることなんかするだろうか。猫殺しと竜二の毒殺は、少年たちにとって、物質的利益を得るためでもなければ、相手を殺したということに楽しみを覚えるためでもなかった。猫殺しという行動は道徳的にいえば、残酷な動物虐待になるが、少年たちにとって、昔の人々が牛や羊など殺して神様に捧げる神聖な儀式、すなわちイニシエーションのようなものである。殺された猫は、少年たちから「まともな人間」になるための「供え物」である。小説の最後、首領はわざわざ竜二の見えるところで、「皮の手袋をゴム手袋にはめかえている」という行為についても同じく考えられる。「今だ！今だ！今だ！」、「これが最後の機会なんだ」と首領が重ねて言ったとおり、少年たちは、いたずら好きな不良者でもなければ、快楽殺人鬼のような変質者でもなく、堂々と儀式をはじめようする首領のように、みんな本気で、厳粛的に、大人に決められた法律による大人になる前、子供であるうちにこそ許される最後の機会を逃さないため、真剣にやっているわけである。

そういう必死な少年の姿に「特異児童」[34]と呼ばれる三島身の影が見られる。『午後の曳航』を書いたころの三島について、井上龍史が次のように分析した。『鏡子の家』が世に受け入れられ

---

[32] 野口武彦『三島由紀夫の世界』講談社、昭和 43 年、211 頁。

[33] 林房雄「文芸時評」『朝日新聞』、昭和 38 年 11 月 29 日。

[34] 田中美代子編『鑑賞　日本現代文学２３』角川書店、昭和五五年一一月、二六二頁

なかった時以降、深刻な虚無に蝕まれ、綱渡りのような生き方を続けてきた。昭和四十年以降は、『豊饒の海』を執筆し、『英霊の声』を発表し、民兵構想のために精力的に活動してきた。ところが、今すべてが失速してしまった。（中略）『考えることができない』ものが、既に三島を襲っているのである」。[35]

空っぽの世界に輸血しようと目指している少年と同じく、三島自身も褒めてほしいというわけでもなければ、理解すら求めていなかろう。ただ、法律のような権力に囚われず、懸命に新たな創出ができる死を表現しようとしている。それは、解剖されている猫のように、死の外部と生の内部を持っている激しくて、複数で、生命と共存しているものである。そういう内部こそ、少年が殺すという大義である。その殺しはもちろん世俗的大義とはいえないだろうが、そういう「非大義」も同じく一種の「大義」であり、法のような基準に合わない「基準外」の大義である。権力の束縛から脱出し、大義を果たしているうちに、少年という存在は、一種の「方式」、または芸術のような「表現」になる。

そういう「少年」であることため、刑法から免れた特権のほか、さらなる特性が存在している。それは、少年が大人を曳航しようとする必死さと大人の世界に曳航される無力さという両義性のことである。母と竜二の結婚が告げられた場面では、大人の目の中の登は次のように描かれている。

> 登は今まで大人たちからこんな手厚い扱いをうけたことはなく、大人たちが自分の前でこんな大袈裟な逡巡を示すのを見たこともなかった。これは何か大人たちの儀式らしかった。彼らの言いたいことはもう登にはわかっていて、それは概ね退屈だった。ただ母と竜二が、円卓のむこうに、登の心を傷つきやすい、愕きやすい、無知の、ひよわい小鳥のように扱うのが壮観だった。彼らは皿の上に、その繊細な、触っただけで壊れそうな、柔毛を逆立てた小鳥を載せて、どうしたらその小鳥の気を悪くさせずに、その心臓を食べてしまえるか、と思案しているように見えた。（第二部・第五章）

それに対して、大人の前では、登はいつも大人たちが望んでいる子供でいている。母と別れて旅立っていく竜二の出帆を見送るとき、こんな登が描かれている。

> 登はといえば、登は子供らしさを装いながら、この人物、この状況の完璧性を見張っていた。見張りが彼の役目だった。与えられた時間はなるたけ短いほうがよかった。短ければ、完璧性がそこなわれる度合も少ないだろう。（第一部・第八章）

母にとって、かつて一番だった登が竜二に替えられた場面でも「子供らしさを装っ」た登がい

---

[35] 井上隆史『豊饒なる鎧　三島由紀夫』『日本の作家（シリーズ４９）』新典社、平成二一年、二三二頁

る。

（元旦の日）屠蘇を祝う段になって、例年一番に盃を受ける登が、そのつもりで手をだして母にたしなめられた。

「おかしいな。塚崎さんが一等小さいので飲むなんて」

登は子供らしい照れ隠しを装ってそう言った。そういいながら、一等先に盃を受ける竜二が、その荒れた大きな手にますます小さく見える梅の杯を包んで口元へ運ぶのを熱心に見た。（第二部・第二章）

母や竜二である大人たちの目の中では、登は小鳥のようなか弱い存在である。竜二が登に思われた「英雄」であると同じく、登も竜二思われた「子供」である。そして、少年団の中のほかの子もみな大人たちに子供扱いされている。首領は父親が一等無関心である。一号は正月に父親に殴られた。二号は父親にいつまでも空気銃を買ってもらえない。四号は、三人の妾もいる父親がいつも酔って帰ってきて母親をいじめる。五号は、父親が神様ばかり祈っている。しかし、子供らしさを装うまでしなければならない登をはじめ、その少年たちはとっくに子供でなくなっている。ほんとうの子供なら、「子供らしさを装う」必要がないから。子供らしさを「装う」には理由がある。

登が母子家庭の子とはいえ、母の房子は今でも贅沢なブランド品といえるランバンの香水などを使ったりして、テニス・クラブに通えるほど、金銭的や時間的に十分余裕があるので、登は生活には困っていないのに違いない。それから、親から空気銃を買ってもらいたい二号ことや、昼飯に持ってきた弁当のサンドイッチや魔法瓶の冷たい紅茶ということからも、首領はもちろん、みな「いい家の子」であることが明らかになっている。しかし、そういう裕福な家の子だからこそ、普通の子供なら好きそうな贅沢なものにはまったく興味がなくて、逆に物置のような自分の生活から遠く離れたものを「愛している」。元気に生きていた仔猫の死、父親になってくれる竜二の死を望んでいる少年たちは、いつも自分たちにとって「非在」なるものを求めている。一方、少年たちも、自分の中でだんだんなくなっている、いいかえると、非在化している子供らしさを大人たちに求められている。たえずに大人に非在化されながら、大人を非在化させている少年たちは、経済面でも、学校でも、そして、法律でも装った「子供」という盾のような「特権」を活用している。ただ、彼らの行動であれ、言葉であれ、子供や少年というものから遥かに離れている。少年たちは竜二を死へ引っ張っていくうちに、自分たちは竜二のような大人という存在に引っ張られ、彼らが憎んでいる悪の大人の世界へ曳航いくものである。普通は未来性があると思われる少年たちは、思い通りになれず、いやでも太陽が沈む方向に変わる人生の「午後」へ曳航されてしまう。少年たちにとって、人にも否定されながら自らも否定する人生へ「曳航」される宿命しか待っていない。そういう「曳航される」側に立っている少年の後ろにももちろん、途方に暮れて自決までに至った三島自身の姿が隠されているだろう。

おわりに

猫は三島に愛された動物であった。竜二は少年に憧れていた大人であった。『午後の曳航』では、三島は13歳という刑事責任を免れる年齢の少年たちの手を借りて、愛する猫を殺し、黄金の肉を持った竜二を殺そうとした。少年に殺された猫も殺そうとされる竜二も、殺しという行為によって削除された少年の弱い一部である。その殺しは三島の不可視の思想を可視化する動作である。その殺しによって猫、少年と竜二の三者に、小柄の劣等感、繊細な感受性と弱い精神の自分を削除したいという三島自身の願望が投影されている。小説の最後は、「誰も知るように、栄光の味は苦い。」という一文で終わった。その味は、竜二にとって毒入りの紅茶の味になるだろうが、彼がかつて夢想してやまぬ「光輝にあふれた死」は少年の手を借りて実現できるようになる。それと同時に、少年も憎む大人の世界へ曳航されつつあることになる。誰もが知るように、切腹した三島は自分の「内部」をこの世に見せた。『午後の曳航』では、解剖で開示された猫の内部、海のような理想と陸のような現実のどちらにいくかと迷った竜二的ディレンマ、そして究極な殺しまでやっても、嫌な世界に曳航されてしまう少年の変えられない運命は、すべて三島自身の死を予告しているものである。三島自身もきっとその苦さあってこその栄光の味を堪能していたのだろう。

参考書物：

1. 三島由紀夫『三島由紀夫集 新潮日本文学45』昭和43年9月、新潮社
2. 野口武彦『三島由紀夫の世界』昭和43年12月、講談社
3. 『新潮 臨時増刊 全巻 三島由紀夫大鑑』昭和46年1月、新潮社
4. ジョン・ネイスン／野口武彦訳『三島由紀夫―ある評伝―』昭和51年8月、新潮社
5. 田坂昂『増補三島由紀夫論』昭和52年4月、風濤社
6. 田中美代子編『鑑賞 日本現代文学23』昭和55年11月、角川書店
7. 梶谷哲夫『パトグラフィ双書7 三島由紀夫 芸術と病理』46年10月、金剛出版
8. 北垣隆一『三島由紀夫の精神分析』昭和57年1月、北沢図書出版
9. 菅原洋一は『三島由紀夫とその海』昭和57年12月、近代文芸社
10. 三好行雄『三島由紀夫必携 特装版』昭和58年5月、学燈社
11. 越次倶子『三島由紀夫 文学の軌跡』昭和58年9月、広論社
12. 『国文学 解釈と教材の研究』昭和60年、学燈社
13. 村松剛『三島由紀夫の世界』平成2年9月、新潮社
14. 三島由紀夫『三島由紀夫全集14』昭和43年9月、新潮社
15. 磯田光一『磯田光一著作集1』平成2年6月、小沢書店
16. 『国文学解釈と鑑賞』平成4年9月、至文堂
17. 三島由紀夫『決定版 三島由紀夫全集9』平成13年1月、新潮社